

美容整形・美容医療を望む人々 — 自分・他者・社会との関連から

谷本 奈穂*

要 旨

本論文は、美容整形や美容医療（プチ整形）が普及する現代社会において、それらの施術を受けたいと思う人々の①属性、②身体意識を明らかにする。また、以前行った調査で、美容整形を希望する理由に「自己満足のため」が最も多かったという結果をうけ、③美容実践が、身体を自分の所有物と感じてアイデンティティを再定義するような主体的な経験なのかも明らかにする。

25～65歳の男女800人に調査票調査を行い、分析した結果は次の通り。①美容施術を望むのは男性よりも女性である。性別以外の、年代、世帯年収、学歴、既婚・未婚といった属性では有意差が見られなかった。②美容実践はあくまでも第一義的に「自分の心地よさ」（＝自己満足）のために行われる。自分の心地よさという理由は、美容実践でない行為においても、美容実践を望む人が、望まない人より使用している。ただし、美容実践を望む人ほど「他者」の評価も求める傾向ももつ。③美容実践は、性別と世帯年収に規定される。また自己アイデンティティの再構築を目指すような主体的な行為というより、むしろ「外見の老化を感じる」こと、「身体に関する社会の常識を守るべき」という考えを持たない」ことに規定される行為でもある。

したがって、美容実践は、第一に「自分」という位相で語られる行為である。ただし、自分の心地よさの背後には「他者」の評価期待が含まれる。そして身体に関わる常識という意味での「社会」的影響は後景に退いている行為である。

キーワード：美容実践、自分／他者／社会

* 関西大学総合情報学部

People intending to undergo cosmetic surgery or cosmetic medical care

Naho TANIMOTO

Abstract

This paper analyses people intending to undergo cosmetic surgery or cosmetic medical care in contemporary Japan. It aims to explore (1) their attributes, and (2) their body consciousness.

The study found that the most popular motivation for cosmetic surgery was “self-satisfaction”.— Following this, the study investigated (3) whether cosmetic practices can be regarded as subjective experiences, which promote the re-definition of identities.

The results of this later survey (involving 800 informants) are as follows.

First, more women want to have cosmetic interventions than men. Other attributes, including age, academic background, income, and marital-status, did not show any significant influence on motivations.

Second, some people want to have cosmetic interventions because of a sense of self-satisfaction, however, they tend to want positive evaluations from “others” too.

Third, “awareness of aging” and “lack of a conviction to maintain common sense in relation to one’s body” are more likely to underpin a desire to undergo cosmetic intervention than “the intention to reform self-identity.”

Therefore, cosmetic interventions should be understood in terms of “the self,” positive evaluations by “the other,” and “self-comfort.” Although cosmetic practices are social practices, they are not significantly influenced by “the social.”

Key words: cosmetic interventions, the self/the other/the social

1 身体への強制力と自己満足

いつの時代にも「外見を整えること」は行われてきた。だが、その意味づけは一様ではない。例えば、顔におしろいを塗る行為は、ある時は「魔除け」のため、あるときは「仲間同士の連帯」のため、またあるときは、「おしゃれ」のためになされてきただろう。S・ネトルトン (Nettleton, 1995) が指摘するように、身体が所与の自然物ではなく「社会によって位置づけられる」存在である限り、外見を整える行為もまた社会によって位置づけられる行為となる。つまり、当該社会によって、外見を整えることの意味づけは構築されていくということであり、したがって、その意味づけを考察することは、当該社会を考えることにつながっていくことにもなる。

それでは、美容整形や美容医療が普及する現代、外見を整えることはどのような意味を持つのだろうか（本稿では、美容整形はメスを使った施術、美容医療はプチ整形とも呼ばれるレーザー・投薬・注射などを用いた施術を指すこととする）。

本稿は、外見を整える行為のうちでも美容整形・美容医療に焦点を当て、それらを受けることを望む人々とその意識について分析していく。具体的には、①美容実践を望む人々の社会的属性、②美容実践を望む人々の身体意識および美容を望む意識を規定する要因、について明らかにしていく。それらを明らかにしていくことが、ひいては現代社会を考えることにもつながっていくはずである。

1.1 身体への社会的強制力

身体はアイデンティティに影響を与えられられている。一方で、身体はアイデンティティを固定化するものである。生まれつきの皮膚の色、体型、健康の程度、身体的能力などは、私たちのアイデンティティを否応なく形づくっていく。他方で、身体を変えていけば—医療の力や運動を通じて—、私たちはアイデンティティを変えていくこともできる。身体はアイデンティティを変容させる契機ともなるのである。

後者の、自分の身体を変えてアイデンティティを再構築できることについては、様々な指摘がなされている。一部で「自由」や「変化」や「自己決定」として称揚する向きもあるが、社会学的議論の多くでは、身体を「変えていくこと」「形づくること」は、個人による本当の自由選択ではないという批判がなされている。例えば、M. Featherstone (1991) は、首尾一貫したアイデンティティの感覚を構築し維持するために、身体は自己表現の「乗り物」にさせられると主張するが、それは結局、「消費主義 consumerism」によって強制されていると見なしている。R. Gill と K. Henwood と C. McLean (2005) も、個人のアイデンティティの一部として身体を変容させるように「働きかける圧力」があると考えている。「消費主義」にしろ「圧力」にしろ、それは身体を変えさせていくような「社会的強制力」であることに変わりない。

特に、身体美についての議論において、強制力の指摘（と批判）は数多くなされている。例えば、河原和枝（2005）はフィットネスにおける「健康」と「ファッション（あるいは美）」のイデオロギー性を問題としている。河原は、フィットネス産業によって、健康への不安が社会的に構築されることや、魅力的な身体像がねつ造されることを問題視する。それはつまり、健康不安を煽り、美的身体像を押しつける「イデオロギー」というある種の「社会的強制力」を措定していることでもある。

もちろん美容整形のような美容実践も、あくまで女性を縛りつける美への社会規範に従う文化的対象として論じられる。A. Balsamo (1996) や S. Bordo (2003) たちの主張では、たとえ、整形実践者が「自分の好きな顔に変える」と言ったとしても、そこに「本当の」自己決定があるわけではなく、社会に伝播する女性美の典型に合わせるような形で顔をつくりあげていることになる。あるいは、井上輝子（1992）も女性に美しさが「義務として課せられている」ことを批判しているし、笠原美智子（1998）も「外見上の平均的美の基準を押しつける文化構造とそこから生み出された一律な価値観が問題」だと述べている。このように、美容実践を女性たちが美の社会規範に縛られているが故の行為と捉える議論が、盛んになされてきたのである。

1.2 身体の所有と主体性

美への強制力を認識し、それを批判することは重要である。しかし同時に、人びとが美容実践を行う複雑なモチベーションを、より具体的なレベルにおいて、あるいは実践者たちの語り(語り)に寄り添う形で、明らかにしていく視点も必要ではないか。美容実践を「社会的強制力」に従うものとして捉える先行研究が大勢を占める中で、このような角度からの研究も進められている。

例えば、D. L. Gimlin (2002) は、美容実践を行う女性へのインタビューを通して、身体を変えていく時の複雑で感情的なモチベーションを明らかにしようとした。そして、女性達が美への社会規範に従わされているという、従来の見方に反論している。女性が美容にまつわる実践へ参加することで自分のアイデンティティを再定義し、同時に、身体に働きかけるのと同じように自己イメージに働きかけることの意義を、Gimlin は明らかにしたのである。この議論の中で、美容整形は、それを選択する多くの人にとって、最終的に人生にエンパワーメントを与える経験であるという。あるいは、K. Davis (1995) も、美容整形の可能性を、自分と身体との関係を変えていき、違ったアイデンティティを構築できるところに見出す。一人の女性が身体に縛られた自分自身を受動的に受け入れていくのではなく、身体において／身体を通して世界に働きかける主体となることを指摘しているのである。

つまりは、美容整形や美容医療を、「自分の力で身体を変え、ひいては、自分自身のアイデンティティのあり方を再構築できる」経験として捉えることができるというわけだ¹⁾。このような先行研究が指し示しているのは、美容実践におけるエンパワーメントの存在であり、美容実践者が自分の外見を自分の好きなようにしようとする「主体性」をもっている事実である。したがって、美容実践は、「自分の身体は自分のものである」という所有感や、「自分の身体を自分

自身で変えていける」という身体への統制感と、密接に結びついていることが予測される。

「身体の囚人 a prisoner of her body」(Davis) になるのではなく、身体的所有者となること、そしてその身体を主体的に変える経験を通じて自己アイデンティティも再構築すること。この視点から美容実践を見れば、単なる社会的強制力に踊らされているわけではない、実践者の意識もうかがえよう。二人の研究は、これまでの先行研究を乗り越えようとする試みであり、実践者の語りにより寄り添った考察をしているものといえる。

1.3 動機の語彙としての自己満足

それでは、美容実践における「主体性の議論」と関係しそうな「自己満足」というタームについて考えたい。筆者は2003～2007年にかけて、美容整形に関わる調査（調査票調査とインタビュー調査）を行った。その結果は拙書『美容整形と化粧の社会学』（2008）に著しており、そこで次のことを述べている。第一に、一般的には美容整形は「身体について劣等感があるから」、「異性に魅力的と思われたいから」するのだと語られてきたこと。しかし、第二に、当事者達の語りとしては「自己満足のため」が整形の理由に多く挙げられていることである。この調査では、美容実践を望む人の多くは「社会的強制力」に言及するよりも、「自分の満足のために整形を受けたい」と語る傾向があることが明らかとなった。

当然、「自己満足」というタームの中には、様々な位相が含まれる。だからといって、「自己満足といっても本当は劣等感があるのではないか」「本当は異性にもてたいからではないのか」「他の理由が何であっても自己満足といえるのではないか」などと批評するのは、まったく見当違いなことだ。なぜなら、まさにこれは「動機の語彙」だからである。当事者の「真の」動機を、研究者の側で決定することは、そもそも不可能であるとすらいえる。実際のところ、当事者の動機は単一のものではなく様々な要素が混じっており、いずれが「真」であるかを決定することは難しい。さらに当事者が「真の」動機であると信じるころの動機を持っていたとしても、それを語りえるとも限らない。むしろここで重要なのは、様々な理由のバリエーションの中から「自己満足」が、美容整形の「適切な」理由として、実践者に「選ばれる」という事実なのである。

このターム（注：自己満足）は、具体的な理由というよりは、そう言えばすむ「動機の語彙」である。よって自己満足の中身を追求してもあまり意味はないだろう。大事なことは、身体を変更する時に「自己満足」という言葉を出せば正当化される社会背景なのである。

（谷本2008）

上記のような「動機の語彙」の立場に立ち、拙書では「自己満足」の「真の」中身を追求することはせず、それが語られる背景や、それが語られるときの「自己」とはどういうものかを考察していったのである。

その考えは間違っていないと今も考えているが、しかしながら、研究を進める中で、自己満足についてより深く検討する必要があると感じた。自己満足の中身を決定することは不可能であるが、一口に自己満足として語られるものが具体的にはどのような状況を指しているのかを、もう少し整理することなら可能ではないかと考えたのである。

特に、「自己満足」と(1.2で述べた)「身体の主体性」の議論との関連を明らかにする必要もあるだろう。自己満足のため行われる美容実践とは、身体を自分のものと感じ、身体を自分自身で変え、自分のアイデンティティを再定義するような主体的な経験なのだろうか。そこで、本稿は、冒頭に示した①美容実践を望む人々の社会的属性、②美容実践を望む人々の身体意識および美容を望む意識を規定する要因に加えて、③自己満足と身体の所有観や主体性との関連も見ていきたい。そうすることで、社会的強制力の議論とは違う視角を与える「主体性」の議論を、さらに深化させることになるだろう。

2 分析結果

2.1 調査概要

①②③の疑問を解明すべく、調査票を作成し、美容に関わる意識調査を行った(添付資料)。2章では分析結果を、3章では考察を提示する。

以下では今回の調査を「第二回調査」とし、2003～2007年に行った調査を「第一回調査」と記すことにしたい。また、調査といっても調査票調査とインタビュー調査の両方を行っているが、本稿で扱うのは調査票調査だけに限定する。2011年12月13日から、25～34歳、35～44歳、45～54歳、55～64歳の男女各100名ずつ、計800名の回答が集まるまで、インターネットによる調査票調査を行った(12月15日に調査終了)。第一回調査がすべて20歳代の若者への調査であったが、今回(第二回調査)は年齢層を広げている。年齢、性別以外の回答者の属性は、論末にある付表1～4の通りであるⁱⁱ⁾。

調査票の選択肢は以下のように作成した。まず第一回調査において、プレ調査を行い、各々の質問に対する自由回答を得ている。その自由回答に基づいて選択肢を作成し、第一回本調査に使用した。そして、第二回調査では、同じ選択肢から、不要なものを削除するとともに、年齢にかかわる項目を付け加えた。また「自己満足のため」という選択肢は、さまざまな他の要素も自己満足と呼べることから、「自分の心地よさのため」という文言に変更している。

なお、調査票において「美容整形」と「美容医療」というタームを使用しているが、「美容整形」はメスを使った手術、「美容医療」はメスを使わないでレーザー、投薬、注射などを用いた、プチ整形とも呼ばれる施術であることを、調査票の冒頭で調査対象者に対して説明してある。

男女800人に対する「あなたは美容整形、または美容医療を(片方だけでも)今後してみたいと思った(思う)ことはありますか」の質問に対して、「よくある」「時々ある」をあわせて104名、「ほとんどない」「全くない」は696名であった。回答者を女性だけに絞ると、「よくあ

表1 美容整形・美容医療をしたいと思ったことがあるか

	全 体		女性のみ	
	N	%	N	%
よくある	16	2.0	15	3.8
時々ある	88	11.0	65	16.2
ほとんどない	227	28.4	121	30.2
全くない	469	58.6	199	49.8
合 計	800	100.0	400	100.0

る]「ときどきある」が80名となり、20%もの人が医療による身体の美化を行いたいと思ったことがあると分かる(表1)。

実際にそれらを行った人も聞いてみたところ、メスを使う美容整形を受けた人が8人(男性2, 女性6), 美容医療を受けた人が28人(男性1, 女性27)となった。女性のみに関して言えば、美容医療を実際に受けた人は6.8%にのぼっている。

これらの数字をどう見るかは難しいところであるが、女性の5人に1人が美容整形や美容医療を受けてみたいと感じ、5%を超える人たちが美容目的の医療的措置を実際に受けていることは、小さな数字とは思えない。少なくとも、美を目指して医療措置を受ける人々がマイノリティであるとは、もはやいえまい。おそらく、美容実践を望む人々の意識は、(望まない人々をも含む)より一般的な身体観に下支えされつつ、構築されていると考えられる。

そこで、まずは、より一般的な身体観を確認する(2.2)。次に、特に「美容整形や美容医療を受けてみたいと思う人々」の意識を考察する(2.3)。さらに、「受けたい」と思うだけではなく、「実際に美容整形や美容医療を経験した人々」の意識を確認する(2.4)。最後に、美容実践を望むことに最も影響を与える要因は何かを考えることにしたい(2.5)。

2.2 一般的に外見を整える理由

特に美容にかかわらない「一般的に外見を整える理由」を示す。「あなたにとって服や髪型をかえるなど自分の外見を整える理由はなんですか?」という質問に、マルチアンサーで答えてもらったところ、図1の結果を得た。上位3つの項目は「身だしなみとして」68.9%、「清潔感を保つため」40.4%、「自分が心地よくなるため」39.8%となっている。

また、 χ^2 検定で年代および性別について次のような差異が確認できた。年代が若いほど、「同性に評価されたい(-.153**）」、「異性に評価されたい(-.210-**)」, 「流行に乗り遅れないため(-.073*)」, 「自分が心地よくなるため(-.098**）」, 「同性にバカにされないため(-.029*)」, 「異性にバカにされないため(-.105*)」が多く、高齢になるほど「身だしなみとして(.072*)」と答えている(数値はKendallのタウb, **は1%水準, *は5%水準で有意)。

また男性は女性に比べて「異性に評価されたい」と答え(5.626*), 逆に女性は「同性に評価されたい」(16.283**), 「自分が心地よくなるため」(42.277**), 「自分らしくあるため」

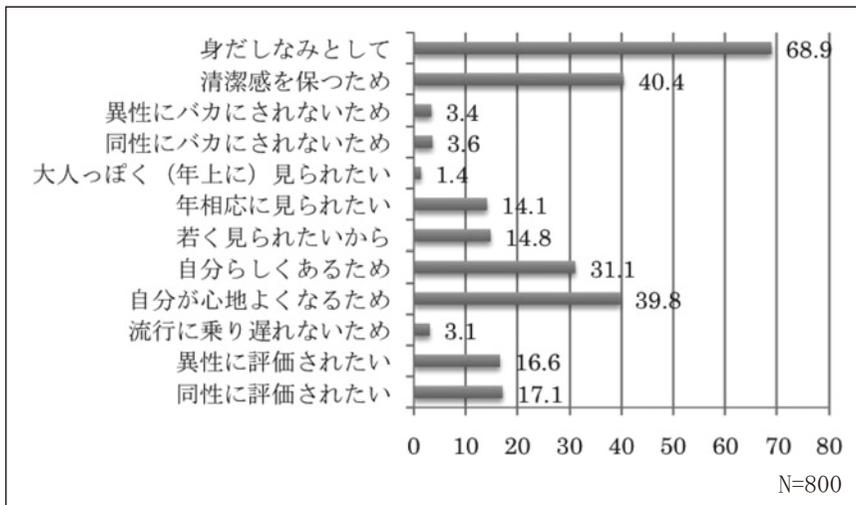


図1 服や髪型をかえるなど自分の外見を整える理由 (%)

(8.869**), 「若く見られたいから」(6.720*), 「年相応に見られたい」(11.222**) と答える傾向がある (数値は Pearson のカイ二乗, **は 1%水準, *は 5%水準で有意)。

ここで、外見を整える理由の位相を、「自分」「他者」「社会」の三つに分けてみたいⁱⁱⁱ。もちろん「自分」「他者」「社会」の三つは、実際のところ明確に分かれるものではないので、あくまで分析的に分けて考えるということである。「自分が心地よくなるため」、「自分らしくあるため」という言い方を「自分」を照準した理由として捉え、具体的に他の人からどう見られるかという「同性や異性に評価されるため」「バカにされないため」「若く見られたいから」などを「他者」を照準した理由として捉え、同じく他者を照準するのでもより社会的な配慮を前提とした「清潔感を保つため」、「身だしなみとして」を「社会」を照準した理由と捉えてみる。

そうすると、年齢別で見ると、若者は「自分」と「他者」、中高年は「社会」を意識して外見を整えていることになる。また、性別で見ると、男性は「他者」の中でも特に「異性」を重視し、女性は、「自分」と他者の中での「同性」を重視することが分かる。性別に関する分析結果は、若い層を対象とした第一回調査と一致しており、男女の意識差は幅広い年齢層で見られるといえる。

2.3 美容整形、美容医療を望む人の意識

一般的には2.2で見たような身体観があると前提した上で、美容整形・美容医療を望む人に注目していきたい。美容整形・美容医療をしてみたいと思うことが「よくある」「時々ある」と答えた人は104名いたが、その人々に対して、「興味を持ったのはなぜですか」を問うた。その回答は図2に示してある。やはりここでも「自分が心地よくなるため」が一番多く、「自分」という位相が強調されている。

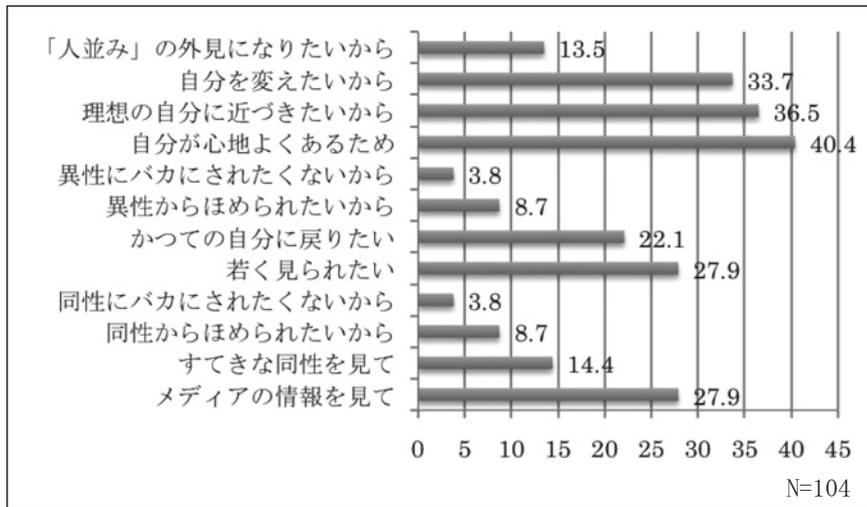


図2 美容整形・美容医療を受けたい理由 (%)

上から順に「自分が心地よくあるため」40.4%、「理想の自分に近づきたいから」36.5%、「自分を変えたいから」33.7%とすべて「自分」という語彙の理由があがっている。次には「メディアの情報を見て」と「若く見られたい」が27.9%で支持されている。理由としてまずは「自分」があがり、そのほかにはメディアの影響と年齢に関わる項目があがるのである。

今回「自分が心地よくあるため」であることが最も多いのは、第一回調査で「自己満足のため」が一番支持された理由であったことと類似している。美容整形・美容医療を望む当事者達の語りでは、ある種「自己満足」に似た語彙が選ばれることが、第二回調査でもはっきりと示されたことになる。

ただし今回は、もう少し詳細に結果を考察していきたい。美容整形・美容医療をしてみたいと思っているかどうかに関して、「よくある」「時々ある」を「ある」グループに、「ほとんどない」「全くない」を「ない」グループに分け、それぞれのグループがどう違うかを検討していく。

まずは、 χ^2 検定で、両グループの「性別」「年代」「世帯年収」「最終学歴」「既婚・未婚」で差があるかを検討した。その結果は、「性別」において顕著な差が出た(表2参照)。男性より女性が美容実践に関心を持っていたことが分かる。だが、その他はいずれにおいても有意差は見られなかった。

次に、性差の影響を避けるため、女性のみでのデータで「ある」「ない」グループに分けて同様に χ^2 検定で分析した。差を見る項目は「年代」「世帯年収」「最終学歴」「既婚・未婚」「外見を整えるのに使う金額の割合」である。その結果は、いずれにおいても有意差は見られなかった。したがって、実は美容実践を希望することを規定する属性は、性別のみということになる。

つまり、美容実践を望む人とそうでない人の間に、年代や収入や学歴による差が見られないということである。ではいったい美容実践を望む人の特徴はどこにあるのか。

表2 美容整形・美容医療を希望する男女差

		美容整形, または美容医療をしてみたいと思っただことがある	
		あ る	な い
	男性	6.0%	94.0%
	女性	20.0%	80.0%

N=800 χ^2 検定: 1%水準で有意

表3 美容整形・美容医療希望者の身体意識 (女性のみ)

	同性に評価されたい	異性に評価されたい	流行に乗り遅れないため	自分が心地よくなるため	若く見られたいから	同性にバカにされないため	異性にバカにされないため
希望する	38.8%	28.7%	10.0%	62.5%	31.3%	8.8%	6.3%
しない	18.4%	9.7%	2.8%	48.1%	14.7%	2.8%	1.9%

N=400 (女性のみ)

そこで、女性のみ「ある」グループと「ない」グループにおいて、「一般的に外見を整える理由」に有意差があるかどうかを同様に分析することで確認した。ここでは有意差が見られ、その結果は表3の通りとなった。美容整形・美容医療を受けてみたい人は、そうでない人の比べて「同性に評価されたい」「異性に評価されたい」「流行に乗り遅れないため」「若く見られたいから」(χ^2 検定: 1%水準で有意)、「自分が心地よくなるため」「同性にバカにされないため」「異性にバカにされないため」(χ^2 検定: 5%水準で有意)と答えている。

ここで確認できることの一つ目は、外見を整える理由として、清潔感・身だしなみといった「社会的配慮は、美容への関心とは関係がないことである。要するに、美容に関心があろうがなかろうが、「この理由を出せばみんなが納得するだろう」と人々が認識する最も「無難な」動機の語彙なのである。

より重要な二つ目のポイントは、「自分が心地よくなるため」という理由の二重性である。「自分」を照準したこの理由は、一般的に外見を整える理由でも高い支持を集めていることから、美容整形・美容医療に関心のない人も、その語彙を使用すると思われる。しかしながら、実は、美容実践を望む人の方が、よりその理由を挙げるのが表3より分かる。つまり、「自分の心地よさ」という語彙は、美容に関心のない人にとっても一般的に外見を整える理由として挙げうる「無難さ」をもちつつも、美容実践を望む人がより使用する語彙となっているのである。したがって、美容整形・美容医療は、特に「自分が心地よくあるために受けるのだ」と語られるような行為なのである。第一回調査で得られた、美容整形の理由として「自己満足のため」が多かったという結果が、第二回調査においても支持されたことになる。やはりあくまでも、「自分」のために受けるものとして、美容整形・美容医療は位置づけられるわけである。

とはいえ、三つ目に、「同性・異性に評価されたい・バカにされないため」「流行に乗り遅れないため」「若く見られたいから」といった理由に有意差が見られたことも注目すべきである。美容実践を望む人ほど、「自分」を語りながらも、実際には「他者」の評価を強く意識している

ことが分かるからである。

ゆえに、美容整形・美容医療を受けたいと考える人は、考えない人に比べて、自分の心地よさを語りつつも、他者の目も気にしていることがうかがえよう。

2.4 実際に美容実践を行った人の意識

2.3では美容整形・美容医療を受けたい人とそうでない人で分けて検討したが、「受けたい人」と「実際に受けた人」との間で身体意識に違いはないのか、という疑問もわくだろう。そこで、2.4では、参考として、美容整形を受けた8人（男性2、女性6）、美容医療を受けた28人（男性1、女性27）の傾向を見てみる。少なくとも、「受けたい人」と「実際に受けた人」の間の関連が深いのか、それとも関係が薄いのかの予測には役立つだろう。

まずは、「受けたい人」と「実際に受けた人」に相関があるかどうかを確認するため、順位相関（Kendallのタウb）を検討した（表4参照）。その結果、今後してみたいと思うことは、メスを使った美容整形の経験であれ、レーザーや注射などの美容医療の経験であれ、強い相関が見られた。したがって、「受けたい人」と「実際に受けた人」の両者には連続性があると見て良い。

次に、「受けたい人」と「実際に受けた人」で一般的な身体観が類似しているのかも確認したい。表3（2.3）で「受けたい人」と「そうではない人」で「一般的に外見を整える理由」の有意差を見たことから、「実際に受けた人」と「受けていない人」でも同じ分析を行った。ここでは美容整形を受けた8人（男性2、女性6）、美容医療を受けた28人（男性1、女性27）のデータを、どちらかを受けたことがある人31人（男性3、女性28人）にまとめている。

美容整形・美容医療を受けた人と受けてない人で大きな差が出たのは、「同性に評価されたい」「異性に評価されたい」「自分が心地よくなるため」である（表5）。全体（男女共）のデータでは「同性に評価されたい」（ χ^2 検定：1%水準で有意）と「異性に評価されたい」「自分が心地よくなるため」（ χ^2 検定：5%水準で有意）であり、女性のみデータでは「同性に評価されたい」「異性に評価されたい」（ χ^2 検定：1%水準で有意）であった。つまり、美容整形・美容医療を受けた人は、「自分」の心地よさのためにしたいと語りながらも、通常の外見を整える行為には「他者」の評価を強く意識するという特徴が見られる。これは表3で見た「受けた

表4 「受けたい人」と「実際に受けた人」の相関

		美容整形、または美容医療を今後してみたいか	
Kendallのタウb	美容整形（手術）の経験	相関係数	.148**
		有意確率（両側）	.000
		N	800
	美容医療（レーザー、注射、薬の内服など）の経験	相関係数	.351**
		有意確率（両側）	.000
		N	800

**、相関係数は1%水準で有意（片側）

表5 「受けた人」と「実際に受けた人」と「受けていない人」の身体意識

	同性に評価されたい	異性に評価されたい	自分が心地よくなるため
受けた	38.7%	32.3%	61.3%
受けない	16.3%	16.0%	38.9%
受けた(女性)	42.9%	32.1%	64.3%
受けない(女性)	21.0%	12.1%	50.0%

上二段がN=800, 下二段が女性のみN=400

い人」たちの特徴と、類似していると考えられる^{iv}。

以上で、「受けた人」と「実際に受けた人」の間には、共通する身体意識があると推測できる。よって「受けた人」を中心に分析しても、「実際に受けた人」の意識にかなりの程度まで迫ることが出来るだろう。

2.5 美容実践を求める意識の要因

「美容整形または美容医療をしてみたい」という意識を規定する要因を探るべく、美容実践を望むかどうかを従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。独立変数として、「性別」, 「年代」, 「世帯年収」, 「最終学歴」, 「既婚・未婚」を用いた。表6にあるように有意な結果が出たのは「性別」(1%水準)であり、次いで「年収」であった(5%水準)。

美容実践を望むかどうかの最も大きな要因は性別である。男性より女性の方が美容実践を希望するといえる。性別の次に影響している世帯年収については、クロス表で確認すると、収入が高ければ高いほど美容実践を望むわけではなかったものの、収入が低いと美容実践を望む人は減っていた。よって、一定の生活の余裕のあることが、美容実践への願望に影響を与えることも明らかとなった。

だが、しかしそれ以外の年代や学歴、既婚・未婚では、美容への関心に影響を与えていないと考えられる。では、その他にいったい、美容実践を求める意識を規定する要因は何なのだろう。それを見るために、同じ分析を「外見に関わる意識」を独立変数として行った。変数には自己満足と身体的所有観や主体性の関係を確認する項目、「自分の外見は自分の好きなようにして良いと思う」「自分の身体は自分のものである」も含まれている。なお、サンプル全体を対象にした分析と、女性サンプルのみを用いた分析を行っている(表7, 8)。

全体では、「実年齢より若く見えるよう心がけている」「外見の老化を感じている」「同性から魅力的と思われたい」「身体に関する社会の常識は守るべきであると考えない」という四つの意識が、美容実践を望む要因となっている。女性のみでは、「外見の老化を感じている」「身体に関する社会の常識は守るべきであると考えない」ことが美容実践の要因となっている。(ここで、「社会の常識」とは何かについて、回答者によって認識が違っているだろうが、世間一般では守られているだろうと回答者が解釈する意識を軽視する態度は、共通している。そのこと事態が重要である。)

表6 美容整形・美容医療希望者と属性（全体）

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp (B)
性別	-1.346	.249	29.133	1	.000	.260
年代	.132	.107	1.523	1	.217	1.142
結婚	.095	.249	.146	1	.703	1.100
年収	-.152	.074	4.172	1	.041	.859
学歴	.085	.086	.962	1	.327	1.088
定数	-734.248	598.161	1.507	1	.220	.000

N=800, Cox-Snell R² 乗:.051, Nagelkerke R² 乗:.095, -2 対数尤度:576.303

表7 美容整形・美容医療希望者の外見に関する意識（全体）

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp (B)
実年齢より年上に見えるよう心がけている	-0.046	0.189	0.058	1	0.81	0.955
年相応に見えるよう心がけている	0.046	0.154	0.091	1	0.763	1.047
実年齢より若く見えるよう心がけている	-0.471	0.173	7.436	1	0.006	0.624
外見の老化を感じている	-0.407	0.17	5.735	1	0.017	0.666
異性から魅力的と思われたい	0.274	0.216	1.605	1	0.205	1.315
同性から魅力的と思われたい	-0.748	0.257	8.459	1	0.004	0.473
自分の外見は自分の好きなようにして良いと思う	-0.264	0.191	1.911	1	0.167	0.768
外見に関して周囲の人の意見を聞くべき	-0.173	0.168	1.058	1	0.304	0.841
自分の身体は自分のものである	0.228	0.204	1.248	1	0.264	1.256
身体に関する社会の常識は守るべきである	0.65	0.177	13.523	1	0	1.915

N=800, Cox-Snell R² 乗:.076, Nagelkerke R² 乗:.141, -2 対数尤度:555.145

表8 美容整形・美容医療希望者の外見に関する意識（女性のみ）

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp (B)
実年齢より年上に見えるよう心がけている	0.039	0.235	0.028	1	0.866	1.04
年相応に見えるよう心がけている	0.063	0.183	0.117	1	0.732	1.065
実年齢より若く見えるよう心がけている	-0.457	0.22	4.316	1	0.038	0.633
外見の老化を感じている	-0.744	0.232	10.29	1	0.001	0.475
異性から魅力的と思われたい	-0.305	0.257	1.404	1	0.236	0.737
同性から魅力的と思われたい	-0.281	0.314	0.801	1	0.371	0.755
自分の外見は自分の好きなようにして良いと思う	-0.223	0.236	0.888	1	0.346	0.8
外見に関して周囲の人の意見を聞くべき	-0.049	0.191	0.066	1	0.798	0.952
自分の身体は自分のものである	0.197	0.251	0.619	1	0.431	1.218
身体に関する社会の常識は守るべきである	0.616	0.221	7.806	1	0.005	1.852

N=400, Cox-Snell R² 乗:.113, Nagelkerke R² 乗:.179, -2 対数尤度:352.233

したがって、美容実践を望む要因となるのは、まず女性であること、世帯年収が一定以上あることである。また、身体に関わる意識として、「外見の老化を感じている」と「身体に関する社会の常識を守るべきという考えを持たない」といったことも重要となる。さらに補足しておきたいのは、男女全体では規定要因となっている「若く見られるように心がけている」および「同性から魅力的と思われたい」という意識についてである。ここでは、女性が（美容に関心があるであろうが）、男性よりも「若く見られるように心がけ」、「同性から魅力的と思われたい」と考えている可能性が考えられるが、美容実践への欲望が「性別」と関連が深いならば、この二つの意識についても、今後、考察の対象としていく必要があるだろう。

しかし、「自分の外見は自分の好きなようにして良いと思う」や「自分の身体は自分のものである」という項目があまり寄与していないことも分かった。自らの身体を所有する感覚や、身体を統制できる主体的な意識は、「自分」の心地よさのために行う美容実践の要因となりうるにもかかわらず、である。美容整形などが普及するためには「身体を自己の持ち物」とする認識が必要になると考えられてきた。身体はかつて「神に授けられたもの」「王の所有物」「親からもらったもの」として認識されていたが、近代以降になり「身体は自分の所有物」という認識が広まって、初めて勝手に手を加えてよくなり、整形への障壁が低くなる。その意味でも、身体は自分のものであり、好きなようにできる、という項目が影響を与えるはずである。しかしそうならない。

所有感や統制感が、美容実践への望みに影響を与えていないとすれば、次のように考えることが出来るだろう。美容実践は、そもそも自己アイデンティティの再構築を目指す「主体的な」行為として選択されるわけではない。もっと違うモチベーションで美容実践を選択し、あくまで結果としてアイデンティティの再構築がなされたのではないかと。

そして、違うモチベーションとして浮上してくるのが、外見の老化を実感することと、身体に関する社会の常識を守るべきという考えを持たないことである。前者が美容実践に「進もうとする」表のモチベーションとして働き、後者が一部ではネガティブなイメージをもたれている美容実践を「許容する」裏のモチベーションとして働いていると考えられる。

社会的強制力（あるいはイデオロギー）による説明とは一線を画す形で、美容実践の研究に新たな視角を与えた Davis や Gimlin の研究であるが、今回の調査では、やや違う結果を得ることになった。その理由は、今のところ二つ考えられる。

一つは、国やそこでの身体文化によって美容実践への評価が違っているのだから、彼女たちの調査と今回の調査の結果がやや異なってしまうことである。美容整形に対する「評価のレパトリー」(Lamont and Thévenot, 2000) が、当該社会によって違えば、その実践者の説明（理由）は変わるからだ。

もう一つは、正当性の問題である。美容整形を「すでに経験した人」が「理由の説明」をするときには、どうしても、動機の語彙を使わざるを得ない。美容整形をある種正当化できる理由でなければならなくなるからだ（それが主体性の議論へとつながった）。しかし、実際に美容

実践に向かうときのモチベーションは、非常に複雑で微細なものであろう。すでに経験した人ではなく「受けてみたい人」における、しかも「受けてみたい理由の説明」ではなく、「(美容と関係ない) 一般的に外見に関わる意識」であれば、美容整形への正当性は必要ない。ここでは美容実践を望む人の「普段」の身体意識が表出しているからである。よって、本論での調査結果は、むしろ、美容への関心の事後の説明ではなく、関心を持つ人々が日常的に持つ身体意識を浮き彫りにしたものと考えられる。

少なくともこの調査で明らかになったのは、第一に、美容整形や美容医療を求める一つの大きなモチベーションとして、エイジングの問題があることである。今後は、老化を実感させるものは何かを考えていかねばならない。

第二に、「社会」との関わりかたである。「自分」「他者」「社会」という位相を想定したとき、2.3で見たように美容実践の理由として「自分」や「他者」が重要になる。だが、実際に美容実践に寄与するのは「自分」の身体の所有感や統制感ではなく、「社会」との関連において、社会的常識をやや軽視する態度である。もちろん、それは反社会的行為を行おうとするとか、社会の常識に抵抗するとかいった類のものではないだろう。もっと緩やかな、「世間での常識」にこだわらなくてもいいだろうといった態度であると考えられる。重要なのは、「自分」の心地よさのために行う美容実践とはいえ、そこに「自己の主体性」が強固にあるわけではないことだ。むしろそれは、社会的常識に対する緩やかな軽視が背景にあることになる。

3 まとめ

以上、第二回調査において、分かったことをまとめていきたい。まず、今回の調査においても、美容整形や美容医療を受けたいという直接的な理由は、「自分が心地よくあるため」「理想の自分に近づきたいから」の割合が高い(グラフ2参照)。第一回調査において、美容行為に向かう要因を、「自己満足」であるとしたが、両調査とも共通した結果が出たといえる。やはり、美容整形など美的実践の理由として、「自分」というタームは重要であることが確認できよう。まずは、美容の理由として「自分が心地よくあるため」、ある意味での「自己満足」が最重要であると考えて良い。

だが、もう少し詳細に分析を進めると、美容実践を望む人ほど「自分」以外の「他者」を意識した理由も現れる(表3参照)。他者に評価されるため、あるいはバカにされないために、または若く見られるために、美容実践を行いたいというのである。したがって、美容実践はあくまで「自分の心地よさ」(あるいは自己満足)のために行うのだと語りつつも、その「心地よさ(満足)」とは、美容実践に関心のない人よりも、「他者による評価」と結びついている可能性がある。つまり、美容実践における「自分の心地よさ」とはが、他者評価によって作られる側面があるかもしれないということだ。

他者評価の重視は、実際に美容整形なり美容医療を受けている人たちにも見られる特徴であ

る。したがって、美容実践を「受[・]け[・]た[・]い[・]」と思うだけから、実際に「受[・]け[・]る[・]」という行為に進[・]む[・]にあたり、他者の評価を求める意識が更なる原動力になる可能性もある。

そして、美容実践を求める意識の要因を分析した。既存の理論に従えば影響を与えそうな「自分の身体を好きにできる」という身体への統制感や「自分の身体は自分のものである」という所有感は、あまり影響を与えていなかった。つまり、美容実践は、自分の心地よさのために求められるとはいえ、自分の身体を所有し統制していく主体的な行為とは違うものようである。美容への関心に影響を与える要素は、「外見の老化を感じること」、「身体に関する社会の常識を守るべきという考えを持たないこと」であった。

冒頭①②の問い（美容実践を望む人々がどのような特徴を持ち、外見を整えることについてどのような認識を持つのか）と、③の問い（自己満足や自己の心地よさのための美容実践が、身体の所有観や主体性と関連するか）について、次のような答えを述べておこう。

① 美容を望む人は、どのような人々なのか。

男性よりも女性である。年代、世帯年収、学歴、既婚・未婚などの属性について際だった特徴は見られない。（ただし年収は、美容を望むことを規定する要因にはなっていた。）

② 美容実践を望む人々は、外見を整えることをどのように認識しているのか。

美容実践を望む人にとって、美容整形や美容医療はあくまでも第一義的には、「自分の心地よさ」「自己満足」のために行われるものである。それは、一般的に外見を整える理由としても登場する理由だが、美容実践者においてより強調される。ただし、分析を進めると、美容実践を望む人ほど、他者の評価も求める傾向も確認できる。

③ 身体の所有観や主体性との関連

美容への動機付けは、自分の身体を所有している意識や、好きなように変えられる統制感に影響されるのではない。すなわち、美容実践は自己アイデンティティの再構築を目指すような主体的な行為として意識されるものではない。むしろ、美容実践を望む意識に寄与する項目は、「外見の老化を感じる」と「身体に関する社会の常識を守るべきという考えを持たない」ことである。

①②③を鑑みるに、次のように結論づけることが可能であろう。身体意識の準拠のあり所を「自分」「他者」「社会」という位相に分析的に分けた場合、美容実践は、第一に「自分」という位相で語られるものである。何より、それは、自分の心地よさや自分の満足のためになされるのだ。と。だが、第二に、その「自分の心地よさ」の背後には「他者」の評価が含まれている。他者に魅力的に思われたいという願いは、美容実践の「理由」としてはあまり挙がってこなくとも、通常身体を整える際に「他者」を意識する特徴を持つ人ほど、美容実践を望む傾向がある。美容実践は、「他者」を意識するという意味では、社会的行為である。第三に、それにも関わらず、社会的常識はあまり守らなくてもいいという意識にも規定されており、「社会」の影響が背景に退いている行為でもある。

本論において分かった点から、今後の課題は、美容実践を求める気持ちと関連している項目

について調査をすることになる。具体的には、老化を感じさせるものは何か、なぜ老化を悪いものと捉えるのか、身体に対する社会的常識をどう捉えているのか、そもそも社会をどう捉えているのかについて、美容実践者にインタビューもしくは調査票調査を行うことになるだろう。

実際の所、美容整形などの動機を探るには、実践した人にインタビューするのは当然必要であるが、それだけでは限界がある。事後の語りは、動機の語彙であり、美容整形を正当化する戦略が無意識であれ含まれることになるからだ。したがって、今回の調査のような、希望者の意識、特にそれを希望する理由ではなく、そもそも持っている日常的な身体意識についての調査を、組み合わせてインタビューしてこそ、初めて意味を持つ。

美容実践は「社会的強制力によるもの」として捉えられてきた。その視角を変える「身体を所有する者の主体的な経験」という捉え方も登場してきた。しかし、そのいずれでもない捉え方が恐らく可能なのである。より実践者たちの日常生活に寄り添って考えれば、誰かとのコミュニケーションの中でふとした瞬間に老化を感じることもあるだろうし、通常は反社会的な行為をとらないけれど常識にこだわらなくても良いと思う場面もあろう。これらの日常の瞬間が、美容整形への欲望のかけらとなっていく。「社会的強制力のせいだ」、「自分自身を作り替えるため」ではない、「何気ない日常生活のあり方を通じて」目指される美容実践。このことを理解していく作業こそが、今後の身体に関する社会学にとって重要であると信じる^{vi}。

※ 本稿は文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）「美容実践を通じた中高年女性のアイデンティティの実証研究：世代・メディア・国際比較」（課題番号：23530633、研究代表者：谷本奈穂）の助成を受けて書かれたものである。

付表1 回答者の既婚・未婚

	結 婚	全 体	
		N	%
1	未 婚	308	38.5
2	既 婚	492	61.5
	全 体	800	100.0

付表2 回答者の居住地

	地 区	全 体	
		N	%
1	北海道・東北	80	10.0
2	関 東	331	41.4
3	北陸・甲信越	34	4.2
4	東 海	75	9.4
5	近 畿	179	22.4
6	中 国	30	3.8
7	四 国	22	2.8
8	九州・沖縄	49	6.1
	全 体	800	100.0

付表3 回答者の世帯年収

	世帯年収	全 体	
		N	%
1	200万円未満	96	12.0
2	200～399万円	188	23.5
3	400～599万円	207	25.9
4	600～799万円	121	15.1
5	800～999万円	87	10.9
6	1000万円以上	101	12.6
	全 体	800	100.0

付表4 回答者の学歴

	最後に卒業した学校	全体	
		N	%
1	中学校（旧制小学校、高等小学校）卒業	14	1.8
2	高等学校（旧制中学校）卒業	189	23.6
3	高等学校卒業後、専門学校卒業	138	17.2
4	短期大学・高専卒業	88	11.0
5	4年制大学卒業	326	40.8
6	大学院卒業	42	5.2
7	その他	3	0.4
	全 体	800	100.0

添付資料**「身体（外見）に関する意識調査」**

関西大学 谷本奈穂

この調査は現代人が自分の体についてどのように考えているかを調べるものです。立ち入ったことをうかがうかも知れませんが、調査の結果は学術的な目的のためだけに使います。また回答していただいた内容は、匿名として統計的に処理され、学術的な目的のためだけに用いられます。ご協力をよろしくお願いします。

なお、下記で美容整形と美容医療という言葉が出てきますが、美容整形はメスを使うもの、美容医療はメスを使わないもの（レーザー、注射、薬の服用など）を指すものとします。

Q 1 あなたの性別と年齢、世帯年収、最後に卒業した学校をお答えください。

・性別 1. 男性 2. 女性

・年齢 [] 歳

・年収 1. 200万未満 2. 200～399万 3. 400～599万 4. 600～799
5. 800～999万 6. 1000万以上

・学校

1. 中学校（旧制小学校、高等小学校）卒業
2. 高等学校（旧制中学校）卒業
3. 高等学校卒業後、専門学校卒業
4. 短期大学・高専卒業
5. 4年制大学卒業
6. 大学院卒業

Q 2 あなたが自由に使えるお金のうち、外見を整える（服、アクセサリ、散髪、フィットネスクラブ、化粧、エステなど）のに使う割合はどのくらいですか。

1. 20%未満
2. 20～39%
3. 40～59%
4. 60～79%
5. 80%以上

Q 3 あなたにとって服や髪型をかえるなど自分の外見を整える理由はなんですか？あてはまるもののすべての番号に○をつけてください。

- | | |
|----------------|--------------------|
| 1. 同性に評価されたい | 7. 年相応に見られたい |
| 2. 異性に評価されたい | 8. 大人っぽく（年上に）見られたい |
| 3. 流行に乗り遅れないため | 9. 同性にバカにされないため |
| 4. 自分が心地よくなるため | 10. 異性にバカにされないため |
| 5. 自分らしくあるため | 11. 清潔感を保つため |
| 6. 若く見られたいから | 12. 身だしなみとして |

Q 4 美容整形、美容医療の経験がありますか。

美容整形（手術） ある ない

美容医療（レーザー、注射、薬内服など） ある ない

Q 5 以下のそれぞれの文章について、あなた自身にどれくらい当てはまるかを右の選択肢からそれぞれ1つずつ選んで、数字に○をつけてください。

	全く当てはまらない	どちらかという 当てはまらない	どちらともいえない	どちらかという 当てはまる	とてもよく当てはまる
1. 美容整形にチャレンジしたい	1	2	3	4	5
2. 美容医療にチャレンジしたい	1	2	3	4	5
3. 実年齢より若く見えるよう心がけている	1	2	3	4	5
4. 実年齢より若く見えるよう心がけている	1	2	3	4	5
5. 外見の老化を感じている	1	2	3	4	5
6. 異性から魅力的と思われたい	1	2	3	4	5
7. 同性から魅力的と思われたい	1	2	3	4	5
8. 自分の外見は自分の好きなようにして良いと思う	1	2	3	4	5
9. 外見に関して周囲の人の意見を聞くべき	1	2	3	4	5
10. 自分の身体は自分のものである	1	2	3	4	5
11. 身体に関する社会の常識は守るべきである	1	2	3	4	5

Q 6 あなたは美容整形、または美容医療を（片方だけでも）してみたいと思ったことはありますか。下の選択肢から、あてはまる番号のどれか1つだけに○をつけてください。

①よくある ②時々ある ③ほとんどない ④全くない

→①②と答えた方は Q7 に、

③④と答えた方は次のページの Q8 にお進み下さい

→①②と答えた方は Q7 に、

③④と答えた方は次のページの Q8 にお進み下さい

Q 7 Q6 で、①②と答えた方にお聞きします。

興味を持ったのはどのような気持ちからですか。

あてはまる番号をすべて○をつけてください。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1. メディアの情報を見て | 7. 異性からほめられたいから |
| 2. すてきな同性を見て | 8. 異性にバカにされたくないから |
| 3. 同性からほめられたいから | 9. 自分が心地よくあるため |
| 4. 同性にバカにされたくないから | 10. 理想の自分に近づきたいから |

5. 若く見られたい
6. かつての自分に戻りたい
11. 自分を変えたいから
12. 「人並み」の外見になりたいから

Q 8 Q6で、③④と答えた方にお聞きします。

興味がないのはどのような気持ちからですか？

あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. 今の体に満足しているから
2. 体は人工的に変えてはいけないから
3. 失敗が怖い
4. 周りの人が反対する（反対しそう）だから
5. 自分らしさを失うから
5. お金がない
6. ばれるのが怖い
7. 痛そうだから

Q 9 あなたは自分の外見について人からよくほめられますか？

下の選択肢からあてはまる番号をどれか1つだけ選び、○を付けてください。

- ①頻繁にほめられる ②時々ほめられる ③どちらでもない
④あまりほめられたことはない ⑤全くほめられたことはない

Q10 あなたは自分の外見について人からどう見られますか。下の選択肢からあてはまる番号をどれか1つだけ選び、○を付けてください。

- ①かなり若く見られる ②どちらかといえば若く見られる ③年相応に見られる
④どちらかといえば年上に見られる ⑤かなり年上に見られる

Q11 以下のそれぞれの文章について、あなた自身にどれくらい当てはまるかを右の選択肢からそれぞれ1つずつ選んで、数字に○をつけてください。

	全く当てはまらない	どちらかという 当てはまらない	どちらともいえない	どちらかという 当てはまる	とてもよく当てはまる
1. 私は、才能に恵まれた人間であると思う	1	2	3	4	5
2. 私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う	1	2	3	4	5
3. 私は、周りの人たちより、優れた才能を持っていると思う	1	2	3	4	5
4. 私は、控えめな人間とは正反対の人間だと思う	1	2	3	4	5
5. 私は、周りの人たちより有能な人間であると思う	1	2	3	4	5
6. 私は、どちらかといえば注目される人間になりたい	1	2	3	4	5
7. 私は、みんなの人気者になりたいと思っている	1	2	3	4	5
8. 私は、自己主張が強いほうだと思う	1	2	3	4	5
9. 私は、人々の話題になるような人間になりたい	1	2	3	4	5

Q 12 以下にあげたそれぞれは、「あなたらしさ」にとってどのくらい重要な要素だと感じますか？ 右の選択肢から、あてはまる番号のどれか1つだけに○をつけてください。

	重要				重要でない
顔	1	2	3	4	5
身 体	1	2	3	4	5
髪	1	2	3	4	5
年 齢	1	2	3	4	5
性 別	1	2	3	4	5

	重要				重要でない
社会的地位	1	2	3	4	5
精 神	1	2	3	4	5
感 情	1	2	3	4	5
名 前	1	2	3	4	5
性 格	1	2	3	4	5

質問は以上です。長時間にわたってご協力いただき、ありがとうございました。

参考文献

- Balsamo, A., 1996, "On the cutting edge: cosmetic surgery and the technological production of gendered body", in *Camera obscura* 22, Jan., pp.207-226
- Bordo, S., 2003 *Unbearable Weight: feminism, Western culture, and the body* University of California Press Berkeley, L.A., London
- Davis, K., 1995, *Reshaping the Female Body*, Routledge.
- Gill, R., Henwood, K., McLean, C., 2005, "Body Projects and Regulation Normative Masculinity", *Body & Society*, vol.11 (1) : 37-62.
- Featherstone, M, 1991, *Consumer Culture and Postmodernism*, Sage.
- Gimlin, D., L., 2002, *Body Work: Beauty and Self-Image in American Culture*, University of California Press
- , L., 2007, Accounting for cosmetic surgery in USA and Great Britain: A cross-cultural analysis of women's narratives, *Body& Society*, Vol.13 (1) , pp. 41-60, Sage
- 井上輝子 一九九二『女性学への招待』有斐閣
- 笠原美智子 一九九八『スードのポリティクス』筑摩書房
- 河原和枝 二〇〇五『日常からの文化社会学』世界思想社
- 谷本奈穂 二〇〇八『美容整形と化粧の社会学』新曜社
- Thévenot, L., and Lamont, M., 2000 *Rethinking Comparative Cultural Sociology: Repertoires of Evaluation in France and the United States*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Latour, B., 1987, *Action-How to Follow Scientists & Engineers Through Society*, Harvard University Press
- , 1999, "On recalling ANT" *Actor Network Theory and After* (Sociological Review Monograph (John Law, John Hassard) ,Blackwell Pub.
- , 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory* (Clarendon Lectures in Management Studies), Oxford University Press.

注

- i もちろん、この主張は、美容実践者が「自分の好きな顔に変える」と言っても「本当の」自由選択ではなくて、結局は社会に普及する女性美の典型にのせられているのだという批判に回収できてしまう。だが、実践者達が語る言葉の重みは大きい。それは実践者達の、単なる自己正当化を超えた、実感や思いでもあり、それらこそが他のアクター（Latour (1987, 1999, 2005) におけるアクター・アクタントの意味で使用）と相互作用しながら社会を作り出すからである。その意味で、「美容整形などで身体を変え、自己アイデンティティも再構築できる」という主張は、正当なものである。
- ii 無作為抽出ではないが、調査結果が妥当ではないとするほどのサンプルの偏りではないと判断した。
- iii 念のため述べておくと、ここでいう理由も、「真」の理由というより「動機の語彙」である
- iv ただし、若干の差異も見られる。「自分の心地よさ」は女性のみのデータでは差が出なかったことから、女性内で「受けた人」と「その他」での差異は、「他者」評価を求めることに特化されている
- v 実際にアイデンティティが再構築されたかは分からないが、少なくとも、実践者からアイデンティティが再構築されたと語られる、ということである。
- vi 身体意識の調査を行うだけではなくて、同時に、「評価者としての同性（女性）の存在」についても調査すべきであると考えている。同性の評価がなぜ重要か、同性の評価はどこで・どのようになされているのかも調べることで、「老化の実感」や「社会の若干の軽視」の背後がさらに見えてくるのではないかと、現在のところ予測を立てているからだ。